

もくじ

▽2011年 新年のご挨拶	1
▽大会案内	3
▽受賞者のことば	3
▽研究部会より	6
▽PANewsより	6
▽若手の会レポート	7
▽今後の学会関連行事	8
▽from Editors	8

2011年 新年のご挨拶

会長 勝浦哲夫



日本生理人類学会会員の皆様、本年も明けましておめでとうございます。今年も皆様にとってすばらしい一年になりますよう祈っています。

昨年は、政治の世界は何とももどかしいモヤモヤした一年でした。一方、科学の分野では、北海道大学鈴木章氏と米国パデュー大学根岸英一氏の二人の日本人がノーベル化学賞を受賞したり、小惑星探査機「はやぶさ」が7年ぶりに地球に帰還し、小惑星「イトカワ」の微粒子を持ち帰るという快挙を成し遂げるなど明るい話題が多かったように思います。また、5月には科学誌 *Science* に人類学上興味深い記事が掲載され話題になりました。今まで、ミトコンドリア DNA の解析からネアンデルタール人と我々現生人類との間に交雑はなく、現代人にネアンデルタール人の遺伝子は引き継がれていないとされてきました。ところがクロアチアで出土した3人のネアンデルタール人女性の化石の核 DNA を解析した結果、現生人類のゲノムの4%はネアンデル

タール人に由来すると推定され、現生人類がアフリカを出た後に中近東でネアンデルタール人と交雑した可能性が示されたのです。このニュースを聞いて、「カラダの百科事典」の編集会議で佐藤彦先生と「ホモ・ネアンデルターレンシス」か「ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシス」かで熱い議論を闘わせたことを思い出しました。佐藤先生の洞察力に改めて敬服した次第です。

本学会関連の活動に目を移すと、5月15-16日には井上芳光大会長の下、大阪国際大学で第62回大会が開催されました。栃原裕先生の特別講演「日本人の入浴」、2つのシンポジウム「気楽に生理人類学」(司会：下村義弘先生)、「ヒトとしての身体機能調節の特徴 - 他の動物との比較から - 」(司会：近藤徳彦先生)、そして48題の一般口演とポスター発表があり、大変素晴らしい大会になりました。栃原先生による特別講演は入浴に関連する長年の研究に基づいた大変興味深いものでした。一つ目のシンポジウム「気楽に生理人類学」では一昨年9月に出版された丸善「カラダの百科事典」に掲載された3つテーマについて著者自身による深く詳しいお話を聞くことが出来ました。二つ目のシンポジウムでは運動生理・温熱生理学の新進気鋭のシンポジストによるヒトの機能調節の特徴を他の動物との比較から明らかにしたもので、会場からの質疑も活発で意義深いシンポジウ

ムになりました。

また、10月30-31日には岩永光一大会長の下で千葉大学において第63回大会が開催されました。佐藤方彦先生、樋口重和先生、福島修一郎先生による鼎談「人間を理解するということ - 生理人類学の人間観 -」、シンポジウム「生理人類学の体系 - あれから そして これから -」(司会: 岩永光一先生)を始めとして、46題の一般口演とポスター発表がありました。鼎談では久しぶりに佐藤先生にご登壇戴き、若手二人の先生と生理人類学の本質に迫る討論が行われました。シンポジウムでは生理人類学研究の視点、個人差の扱い方、生理的多型性などについて若手、中堅、ベテラン研究者によってそれぞれの考えが述べられました。会場との活発な質疑もあり、生理人類学とは何かを改めて考える良いシンポジウムになりました。

9月に開催された第10回国際生理人類学会議も本学会にとって大きな出来事でした。オーストラリアのフリーマントルでAlan Bittles 会議長の下に9月9日から12日に開催されました。日本からも多くの本学会員が参加し、総勢12カ国、95名の参加となりました。招待講演ではCynthia M. Beall 教授によるチベットとアンデスにおける高地適応に関する生理人類学のお話がありました。個人的にも「カラダの百科事典」の拙稿「そこに高山(やま)があるから」でBeall 教授の論文を引用したこともあり、大変興味深く聞くことができました。Beall 教授は米国の生物人類学者であるPaul T. Baker 教授のお弟子さんに当たる方です。本学会では本年中にBeall 教授を招聘することを計画しています。その時は是非、多くの会員にお集まり戴きたいと思っております。さて、Beall 教授の招待講演の他、K. McElreavey 博士の招待講演、30題の口演発表、36題のポスター発表があり、活発な質疑と共に有意義な会議となりました。開催地のフリーマントルは西オーストラリアの州都パースから南へ電車で30分程の海岸沿いの街です。海岸沿いのレストランで食べたシーフード、青く澄んだ海と空、ウエルカム・レセプションの会場に来てくれた本物のカンガルーの赤ちゃんやコアアラなど今でも良い思い出として深く心に残っています。

昨年はこの他、2月に九州大学芸術工学部で第4回研究奨励発表会、12月には芝浦工業大学豊洲キ

ャンパスで第5回研究奨励発表会が開催されました。本学会員が指導されている学生のフレッシュな発表がありました。こうした発表の機会は学生自身にとっても大変よいものです。様々な視点からのアドバイスを受け、研究のブラッシュアップにつながるものと思います。今年は1月に九州大学芸術工学部と神戸大学梅田インテリジェントラボラトリで第6回、第7回研究奨励発表会が開催されます。東京で始まったこの発表会が、福岡、そして大阪と広がってきたことは大変喜ばしいことです。

さて、今年の大会は、6月11-12日に栃原裕大会長の下、九州大学大橋キャンパスで第64回大会が開催されます。また、11月26-27日に関西大学で小谷賢太郎大会長の下に第65回大会が開催されます。それぞれ多数の会員のご参加とご発表を期待しています。

昨年のPANews 新年の挨拶文で「英文誌 J. Physiol. Anthropol. のインパクトファクターの取得がついに現実のものになりそうです」と書きましたが、本当に現実になりました。昨年4月にWeb of Science への収録が確認され、昨年の1号に掲載された論文から収録されています。今年の論文と合わせた2年分の論文が来年1年間に何件引用されるかによってインパクトファクターが決まります。これからも良い論文を多数ご投稿下さいますようお願い致します。

この他、法人化、国際生理人類学連合(IAPA)の実質化、科研費などについても、理事会で検討しています。これらについても良い方向に向かうように副会長、理事、幹事などの役員共々頑張っていきたいと思っています。本年も会員皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

【大会案内】
第64回大会（2011年福岡）の
お知らせ ー第1報ー

大会長 梶原 裕
(九州大学大学院)

第64回大会は、下記の予定で開催いたします。
ご参加くださいますようお願いいたします。

本大会では、Wollongong大学のTaylor教授による特別講演 Human heat adaptation, シンポジウム2題「環境及び遺伝の要因と生理的多型性との関係性」、「暑熱環境への適応」を計画しています。特に、今回の大会では、長期暑熱順化に関する総説と最新の知見が紹介される予定です。さらには、九州大学大学院芸術工学研究院デザイン人間科学部門の実験施設「環境適応研究実験施設」、「居住空間実験住宅」の開放も行います。

一般演題の受付スケジュールなどは、学会ホームページ等で随時お知らせいたします。

多くの会員の皆さまが発表いただき、6月に九州大学大橋キャンパスにてお会いできることを楽しみにしています。

記

大会長：梶原 裕
会期：2011年6月11日（土）・12日（日）
会場：九州大学大橋キャンパス
「多次元デザイン実験棟」

プログラム概要(予定)：

- 0) 理事会・若手の会 (6/10)
- 1) 一般口演 (6/11・12)
- 2) ポスターセッション (6/11・12)
- 3) シンポジウム1, 2 (6/11・12)
- 4) 特別講演 (6/11)
- 5) 評議員会 (6/11)
- 6) 懇親会 (6/11 大学食堂)
- 7) 施設見学(環境適応研究実験施設, 居住空間実験住宅など, 6/11)
- 8) 総会 (6/12)
- 9) 学会各賞授賞式 (6/12)

特別講演 (6/11)

Prof. Nigel Taylor (University of Wollongong, Australia)

Human heat adaptation: an evaluation of the historical and contemporary evidence for ethnic differences.

シンポジウム1 (仮題)：環境及び遺伝の要因と生理的多型性との関係性

2011年6月11日（土）午後最後2時間：人類学関連学会会員にはオープン

司会：安河内 朗

- ・岩永光一 (千葉大学), 太田博樹 (北里大学), 颯田葉子 (総合研究大学院大学)

シンポジウム2：暑熱環境への適応

2011年6月12日（日）午後一番2時間

司会：梶原 裕

- ・Titis Wijayanto (九州大学), Joo-Young Lee (九州大学), 若林斉 (九州大学)
- ・井上芳光 (大阪国際大学), 大中忠勝 (福岡女子大学)

大会事務局 (問合せ先)：

〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

九州大学大学院芸術工学研究院 梶原研究室

日本生理人類学会第64回大会事務局

E-mail: jsps64@design.kyushu-u.ac.jp

Tel/Fax: 092-553-4522

・大会案内郵送 (総会・評議員会案内)：

2011年2月初旬

・演題締切 (予定)：2011年4月11日 (月)

・抄録締切 (予定)：2011年5月10日 (火)

以上

【受賞者のことば】

2009年度学会各賞の選考が行われ、学会賞、優秀論文賞、奨励賞の各受賞者が決まり (論文大賞は該当者なし)、第63回大会時に開催された総会後に授賞式が行われました。受賞された方々より以下のことばをいただきました。

日本生理人類学会学会賞を受賞して

宮野道雄
(大阪市立大学大学院)

平成22年10月31日に千葉大学で開催された日本生理人類学会第63回大会において、学会賞を頂戴しました。主な受賞理由は、担当理事として微力ながら和文誌編集を行ってきたことを評価していただいたものです。そもそも私が日本生理人類学会に入会したのは、平成3年のことで、当時、大阪市立大学におられた綿貫茂喜先生に誘われ、講座主任であった中根芳一先生が第29回大会長をされたことがきっかけでした。その後、平成7年から理事に選出され、私が編集委員長を続けてこられた原点としては、学会誌が英文誌と和文誌に分かれた後の和文誌初代編集委員長の中根芳一先生が礎を築いてくださったことがあげられます。私は平成11年8月発行の4巻3号から15巻4号までの約11年間担当してきましたが、この間、編集委員・編集幹事の皆様には大変お世話になりました。今回の受賞は皆様のお陰によるものと深く感謝いたします。

和文誌は、大学院生や企業に所属する若手研究者からベテラン研究者まで広い層からの投稿を得て発展してきました。また、論文の内容も多岐にわたります。学会ホームページの沿革にもありますように、生理人類学という幹の周辺に広がる関連学問分野を包含する懐の深さは、防災研究において人的被害をテーマとしてきた私を暖かく迎え入れてくださった前会長の佐藤方彦先生、前副会長の菊池安行先生のお考えに通じるものがあります。

学会入会の頃は比較的若手の立場にいた私も今年で還暦を迎えました。還暦の年に学会賞をいただいたということは、今後はお返しの人生として学会のために力を尽くしなさいという示唆をいただいたものと理解しています。もとより大きなことはできませんが、できる範囲の中で努力を続けたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

優秀論文賞を受賞して

井上芳光
(大阪国際大学)

この度は、Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY Vol.28. No.3に掲載された、我々の論文“Cutaneous Vasodilation Response to a Linear Increase in Air Temperature from 28°C to 40°C in Prepubertal Boys and Young Men”に対し、平成21年度日本生理人類学会優秀論文賞の栄誉を賜り、誠にありがとうございます。大変光栄に感じますとともに、身の引き締まる思いです。

この論文では、子どもは環境温が皮膚温より低い場合には、皮膚血流量の増大と体格特性（大きな体表面積/質量比）が相俟って乾性熱放散をより促進し、深部体温を若年成人とほぼ同等に調節できるものの、環境温が皮膚温より高い条件下では、子どもの大きな体表面積/質量比が熱獲得を促進するとともに、未発達な汗腺機能が大きく影響し、子どもの生体負担度が成人より大きくなることを実証しました。この結果は、夏季における子どもの熱中症予防策を提案する上で役立つものと思っています。

我々はこれまで、「体温調節機能の発育・老化過程およびその性差」を全身的協関の視点から、順序性や地域性に着目して検討し続けています。今回の研究もその一環で行ったもので、このような形で研究成果が評価され、非常に光栄に思っております。

近年の倫理上の問題等から、国内外とも子どもの実験的研究は実施しにくくなってきています。この実験も子どもたちの協力はもとより、保護者の方々の理解や多くの学生の協力のもとで実施できました。これらの方々に心より感謝致します。今後もこの賞を励みとして、引き続き、「体温調節機能の発育・老化過程およびその性差」を全身的協関の視点からアプローチし、少しでも社会に貢献できればと考えております。

優秀論文賞を受賞して

田中利明
(大阪ハイテクノロジー専門学校)

この度は日本生理人類学会誌14巻4号に掲載されました私どもの論文「頸髄損傷者の常酸素・低酸素環境下における軽運動時の脳内酸素動態」が平成21年度日本生理人類学会優秀論文賞の栄誉を頂き、心から感謝申し上げます。このような素晴らしい賞を頂けるとは露とも思わず、驚くとともに身の引き締まる思いでいっぱいです。

この論文は四肢に障害がある頸髄損傷者(頸髄6番完全損傷者)を対象に、人工的に酸素濃度を下げた低酸素環境下(酸素濃度15.6%標高2400m相当)において軽運動を実施した時の脳内酸素動態変化を、NIRS(近赤外線分光装置)を用いて測定したものです。

マラソン選手や持久的競技選手は酸素濃度が低く気圧の低い高地でトレーニングをするのが一般的になってきています。パラリンピックが注目されるようになり、障害者のスポーツもリハビリテーション目的の運動から、競技目的のスポーツへと変わってきています。近頃では重度障害者の頸髄損傷者も競技スポーツに参加するようになり、標高が高い場所で実施されるスキー競技にも参加する選手が出てきました。しかし、頸髄損傷者は自律神経にも障害があり、健常者と生理機能にも大きな違いがあるにもかかわらず、高地トレーニングの効果や生理機能の研究が進んでいません。

今回の測定の結果、oxyHb(酸素化ヘモグロビン)は健常者で低酸素環境下、常酸素環境下とも有意な差は認められませんでした。これは低酸素環境下において脳内の酸素濃度を一定に保とうとする作用が働いているものと思われます。それに対して頸髄損傷者は低酸素環境下では低酸素曝露開始からoxyHbの減少が見られました。このことは酸素不足の状態でも脳内血流量の増加が見られず、脳内の酸素濃度が不足していることがわかりました。このことにより頸髄損傷者は低酸素環境下において運動を実施する場合、注意を要することが示唆されました。

本研究は頸髄損傷者の運動・労働時のパフォーマンス向上や安全確保に必要な資料であると考え

ています。これからも研究を継続させて、頸髄損傷者やその他の障害を持たれた方が安全に運動パフォーマンスの向上ができるようにサポートしていきたいと考えます。

最後になりましたが、生理人類学会のますますの発展を祈念しまして、お礼の言葉とさせていただきます。

奨励賞を受賞して

澁谷顕一
(長崎総合科学大学)

Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY 誌 28 巻 4 号に掲載されました私共の論文「Bilateral Motor Control during Motor Tasks Involving the Nondominant Hand」が平成21年度日本生理人類学会奨励賞受賞の対象となりました。大変名誉なことであり感謝申し上げます。また、共同執筆者である大阪商業大学総合経営学部の久保山直己准教授に感謝いたします。

今回、受賞対象となりました論文は、右利きのヒトが非利き手で疲労困憊に至る運動をした際の両側一次運動野活動を観察したものです。これまで、Kim et al.(1993, Science)が右利きのヒトが非利き手(左手)で運動をした際には、活動肢と対側の一次運動野だけでなく、活動肢と同側の一次運動野も活動することを報告しています。また、Shibuya and Kuboyama (2007, Brain Research)では、右利きのヒトが利き手(右手)で疲労困憊に至る運動した際には、活動肢に対して対側の一次運動野だけでなく、同側の一次運動野の活動も安静時に比べ低下することが報告されています。本論文では、Kim et al.(1993)が報告したように、同側の一次運動野活動が観察されるか否か、また、Shibuya and Kuboyama (2007)が報告したように両側の一次運動野が疲労困憊に至るに従い活動を低下させるか否かを検証したものです。その結果、仮説通り、右利きのヒトが非利き手で疲労困憊に至る運動をした際、両側の一次運動野活動が観察され、なおかつ、疲労困憊に至るに従い両側の一次運動野活動は低下し、その活動レベルは安静時よりも低くなることが示されました。これに

より、Shibuya and Kuboyama (2007)が利き手の運動で示したように、非利き手の運動中にも、半球間の相互作用が存在し、疲労困憊時には反対側に対して抑制作用が働くことが明らかになりました。

運動中の脳半球間相互作用、及び、脳活動部位の変化に関する分野は、疲労を正しく理解し、全ての生命活動をコントロールしている脳を理解するためには重要であると考えます。この受賞を機に、新しい才能を持った若者がこの分野の研究に興味を持っていただけることを期待します。

【研究部会より】

快適性研究部会のご案内

恒次祐子
(森林総合研究所)

この度、安河内朗先生(九州大学)より快適性研究部会を引き継ぐことになりました。快適性研究部会は1992年から活動をしており、本学会で最も古い研究部会のひとつです。重責に身の縮む思いですが精一杯努めたいと思っています。

「快適性」は生理人類学領域の重要な概念のひとつであり、現代社会に生きる人間の様々な活動に関わっています。働くこと、眠ること、住むこと、作ること、遊ぶこと……なるべく快適に生活したいと全ての人が願っているはずです。でも快適さとは何でしょうか？どうすれば快適性が実現できるのでしょうか？

快適な環境・ものづくりには生理機能をはじめとした人間の特性を知ることが必要です。本研究部会では生理人類学的な観点から気軽に、真剣に快適性を考えていきたいと思えます。ご興味のある方は以下までご連絡ください。部会の情報は学会のメーリングリストやウェブサイトでお知らせいたします。多くの方々のご参加をお待ちしております。

部会長 恒次祐子 yukot@ffpri.affrc.go.jp
(森林総合研究所 構造利用研究領域)

幹事 戸渡智子(千葉大学大学院 工学研究科)

【PANews より】

創刊から満 20 年経ちました

会報担当 岡田 明 (大阪市立大学大学院)
福島修一郎 (大阪大学大学院)

今回の PANews から Volume Number は 21 を数えるようになりました。1991 年 3 月創刊以来、丸 20 年続いたこととなります。Vol.21 ではそれを機に、これまでの PANews の流れを簡単に振り返りながら、このニューズレターの役割についてあらためて考え、記録に留めておくための記事を立ち上げました。

ここに示したロゴは、創刊号の表紙タイトルに使用されていたものです。その後タイトルロゴのデザインは 4 回変更され、もともと B5 サイズだったものが Vol.5 からは A4 サイズに変わると共に ISSN No.も表記されるようになりました。さらに、当初年 4 回、それも学会誌発行の合間に独立して発行されていましたが、Vol.6 からは英文誌に添付される形で発行されるようになり、今日に至っています。

このように、20 年の間にその体裁や発行形態はその時々を反映しつつ変化しており、昨年から Web 版の発行も定期化し、会員・非会員を問わずオープンにされるようになりました。内容的には会員への情報提供や会員の自由な発言の場として機能し続けています。

今号では特に創刊号に焦点をあてました。この PANews という形のニューズレターの意義、発刊に至る経緯や思いについては創刊号に記載された「編集部だより」がそれを如実に語っています。その内容をかいつまんで紹介しコメントするよりも、その凝縮された記事にそのまま目を通していただく方がよく伝わるため、最後にそのほぼ全文を掲載することにいたしました。PANews の担当者としては、あらためて気が引き締まる思いの内容です。

情報技術やコミュニケーション方式が急速に変化していく昨今、PANews も今後その形態をさらに変化させていくことでしょうか。さらに 10 年後の PANews はどうなっているのでしょうか。楽しみです。



NO.1

PAニュース
発行 生理人類学会
事務局 千葉大学工学部人間工学教室内
生理人類学会
千葉市弥生町1-33
郵便番号260
TEL 0472-61-1111(2974)

『【編集部だより】(PANews 創刊号より)』

やっとニューズレターが創刊の運びとなりました。生理人類学の専門家が集合して懇話会が結成されたのが昭和53年、その後研究会を経て学会として飛躍の端を発したのが昭和62年です。この間、昭和58年には機関紙「Annals of Physiological Anthropology (通称APA)」が発刊され、会員に学術的な発表の場が与えられました。しかし産学の協力が求められる時勢もあり、また学会内にも社会との情報交換を求める気運が高くなったことから、平成元年6月よりセミナー、シンポジウムの積極的な開催がはじまりました。お陰様で企業の方からの入会も多くなり、従来にない学会内の活気がでて参りました。会員の分野が広いことや求められる入会の意義が多様になってきたことから、機関紙がAPAだけでは物足りなく感じるようになりました。そこですべての会員に均等な機会、気軽な交流ができる媒体が求められ、ニューズレターを発刊することになったわけです。ですからこれからは、会員の自由な発言や情報交換の場として、ニューズレターを利用して下さい。

発刊は年4回で、APAの発送の合間に出し、情報の速やかな提供に寄与できればと願っています。残念ながら資金、人手の不足から、当分はB4サイズ3枚のオフセット印刷で続けますが、外見を自身の面白さでカバーできるよう努力します。

ニューズレターの名称は、「PAニュース」としました。愛称はPANです。PANに特別な意味を求めたわけではありません。ちなみに「pan」を辞書で引くと、「平なべ」、「顔」、「(カメラの)パン」、「(ギリシャ神話の)牧神」、あるいは他の語と連結して「総(universal)・・・」などの意があり、少なくとも悪くは用いられていないようです。意味はともあれ、このパンをかじって血となり、肉となれば、編集部員にとってこれに優る喜びはありません。』

【若手の会レポート】

Young Researchers' Colloquium in ICPA 2010の報告

若林 斉
(九州大学, ポーツマス大学)

若手の会では国際生理人類学会議(ICPA)の際に若手研究者の研究発表や各国の研究室紹介などを通して国際交流を行っています。今回は、オーストラリア、フリーマントルで開催されましたICPA2010の際に行われたYoung Researchers' Colloquium(2010年9月10日)について御報告いたします。

今回は、本会の発表プログラムの中に組み込まれたサブセッションといった形での若手研究者の研究発表となりました。Young Researchers' Colloquiumのネーミングは大会長のProf. Alan Bittles先生よりいただきました。発表者は、若林斉(九州大学, ポーツマス大学)、西村貴孝さん(九州大学)、高橋隆宣さん(大阪市立大学)、Busara Muensriさん(Mahidol University, Thailand)、Danielle Dyeさん(Curtin University of Technology, Australia)、Michael Blackさん(Murdoch University, Australia)の6名で、震え産熱の寒冷馴化に関する研究、ミトコンドリアハプロタイプと寒冷適応、日本人高齢者の転倒と歩行動作特性、タイにおける高齢患者の看護、骨格筋再生に関する研究、南アジアにおける貧血症の変異特性と内容は多岐にわたりました。大会プログラムの時間に御配慮いただきまして、大勢の先生方に発表を聞いていただき、また、質疑応答においても有益な御示唆をいただきました。特に大学院生の発表者は初めての国際学会発表で緊張したことでしょうし、質疑応答も大変だったと思いますが、めげずに次も発表してください。かく言う私も初めての司会で緊張していたようで、後で写真を見るまで、誰が最前列に座っていたのか気がつきませんでした。発表者、聴講者、司会者ともに若手研究者の国際意識を高める良い機会となりました。

大会長のBittles先生には準備の段階から、若手の会について御意見いただき、かつ、我々若手

本文中のメールアドレスは、@を全角に変換してありますのでご注意ください

の会の活動趣旨を汲み取って、今回の Young Researchers' Colloquium としての開催を御支援いただきましたことを報告させていただきます。また、次回以降の ICPA においても若手の活動を継続していくようにと、強く後押しいただき、心強く思いました。加えて、国際担当の原田一先生（東北工業大学）には Bittles 先生とともに大会全体のことを見渡されて、若手の至らないところを補足、御調整いただいたことかと存じます。また、恒次祐子先生（森林総合研究所）を始め若手の諸先輩方には今回の企画について若手の会としての提案をまとめ伝える際、相談させていただきました。御協力いただきました先生方に御礼申し上げます。次回の国際生理人類学会議の際にも若手研究者の研究発表、国際交流を継続してまいりたいと存じますので、よろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。今回は Social という名の交流会（飲み会）も企画しますので、若手の皆さん奮って御参加ください。

【今後の学会関連行事】

生理人類学談話会

会期：第4回 2011年3月5日

場所：東京

連絡先：工藤奨（芝浦工業大学）

kudous@sic.shibaura-it.ac.jp

第18回若手研究者発表会

会期：2011年6月10日（金）予定（第64回

大会前日）

連絡先：若林斉（九州大学）

waka@design.kyushu-u.ac.jp

日本生理人類学会第64回大会

大会長：栃原 裕

会期：2011年6月11日（土）・12日（日）

会場：九州大学大橋キャンパス

「多次元デザイン実験棟」

大会事務局（問合せ先）：

E-mail: jsps64@design.kyushu-u.ac.jp

Tel/Fax: 092-553-4522

日本生理人類学会第65回大会

大会長：小谷賢太郎

会期：11月26日（土）・27日（日）

会場：関西大学

日本生理人類学会第66回大会

大会長：草野洋介

会期：2012年5月中旬予定

会場：長崎（場所未定）

from Editors

次号（3月末発行）の原稿締切は2月28日（月）

▽新しい年を迎え、21巻1号をお届けします。本文中では20周年を記念する記事を掲載しました。創刊号を読み返してみると、学会活動の記録としてのPANewsの重要性を痛感します。昨年からはWeb版を非会員にも公開しておりますので、学会外への広報の役割も大きくなってきました。PANewsの内容をより魅力的なものにしていきたいと思っておりますので、引き続き、会員の皆さまのご協力をお願い致します。

会報担当理事：岡田 明（大阪市立大学大学院）

福島修一郎（大阪大学大学院）

PANews 編集事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学大学院生活科学研究科

居住環境学講座 岡田明

e-mail akira.pegasus@nifty.com

〒560-8531 豊中市待兼山町1-3

大阪大学大学院基礎工学研究科

生体計測学講座 福島修一郎

e-mail fukushima@me.es.osaka-u.ac.jp